（1）　きょうどを開いた人びと

砂子堰（いさごぜき）

今（いま）もむかしも「米作り」で一番大切なことは、じゅう分な水があるかどうかです。わたしたちの先祖（せんぞ）は、むかしからずっと知恵（ちえ）をしぼり、近所の人々と協力（きょうりょく）し、用水路やため池などを作ったのです。

霊山町（りょうぜんまち）の泉原地内（いずみはらちない）の広瀬川（ひろせがわ）から水を引いて、梁川町（やながわまち）や保原町（ほばらまち）まで水を流す砂子堰は田に少しでも水を引くため苦労（くろう）して作られたんだよ。（1604年ごろ）梁川町（やながわまち）の堀江与五衛門（ほりえよごえもん）と保原町（ほばらまち）の渡辺新左衛門（わたなべしんざえもん）が中心になったんだ。でも晴天が続くと川の水がなくなり水とりのケンカが起きたそうだよ。

自分の田をまもるため「水当番（みずとうばん）」を作り、たくさんの人々が田畑の仕事の他に、水の世話もしたよ。少しの雨でも砂子堰の土手（どて）はくずれて、それを直すのも自分たちだったから、たいへんな手間がかかったんだ……。